



甲斐千香子ステップス初個展である。これまでのステップスのグループ展に幾度なく参加していた甲斐だが、今回、全く異なる様相を見せた。否、これが甲斐の本領なのかもしだれない。

甲斐は画廊内に《墮楽涅槃図》(六曲一隻/屏風/171×380cm/2016年)のみを展示した。下着のみを身につけた女性が寝転んでスマフォを弄っている。右側には7本のビニール傘が吊るされ、左側には洗濯物が干されている。

床には塵が散乱しているのだろうか。《涅槃図》といえば釈迦最後の姿が描かれることは前提だが、ここでは『墮落』ではなく『墮楽』というタイトルが付記されている。墮ることは楽しい、楽しいことは墮ちる、どちらでもいい。釈迦の死を悼む動物の代わりが陳腐な傘や卑近な洗濯物であることに、この作品の主題はないであろう。《涅槃図》に拘ると、この作品の良さには近づけない。実際の人間よりも大きな図が目の前にある現実がまず面白い。

次にタイトルを知らなければ、何のためにこれだけの大画面のこの主題を描いたのかが理解できなくなる。この「理解できない」ことが重要なのだ。得体の知れない、不気味な作品であることが見る者を打ち碎いていく。

甲斐にはこのような作品をこれからも数多く描いて欲しいと、私は願う。得体の知れない、不気味な存在こそ、現代という時代には不可欠なのだ。恐怖を与えることは容易であるが、驚愕を分け合うことはなかなかできないからだ。

甲斐はこの大型の作品だけでは飽き足らず、事務所に38点もの小品をところ狭しと並べた。画用紙、キャンバス、ベニヤパネル、和紙と支持体は様々であるが、ほぼアクリル絵具を使用している。

作品一つ一つの表情も全く異なる。抽象的かと思えば具体的な、特に花鳥風月と人体を描いている。全ての作品は丁寧に仕上げられており、急いで殴り書きされているわけではない。時間をかけたであろう作品も多くある。

個々の作品はサイズも値段もお手ごろであり、購入して直ぐに壁にかけたり棚に置いたりすることができる。作品の価値とは値段ではなく、在り方にこそある。

重要なのは何が描かれているかとか、どのような技法であるかといった問題ではなく、購入者は購入した作品とどのように過ごすかという点にある。緻密であっても、落書きのようであっても、その価値を決めるのは購入者だ。

既存の市場にアンチを提示するのはなく、自分が描きたいものを気楽に描くのではなく、かといって「売れる」作品を量産するという顧客に媚を売るわけでもない。我々は一体なんのために作品を描き、展覧会を企画し、作品を売り、買うのか。素朴な疑問ほど答は容易ではない。

このような点においても、甲斐は我々に驚愕を示してくれた。もしかして甲斐は、日本の美術の制作と販売の概念を超えるアイデアを持っているのかもしれない。若手の安易な発想ではないことは確かなのだ。今後、気になる存在だ。